

通し番号	3966
------	------

分類番号	15-02-12-06
------	-------------

(成果情報名) 根深ネギ「湘南」改良系統の育成	
[要約] 根深ネギ「湘南」から食味を維持しつつ、葉折れが少なく収穫期の葉鞘の伸長が良く、分げつの少ない個体を選抜することにより、新品種「KNS21」を育成した。	
(実施機関・部名) 神奈川県農業総合研究所 生物資源部	連絡先 0463-58-0333

[背景・ねらい]

旧園芸試験場で育成され昭和35年に発表された根深ネギ「湘南」は、埼玉県深谷市在来の合柄系品種に本県逗子市在来の合黒系品種を交配系統選抜した、柔らかな食感を有する、初期分げつ性の、やや晩生の根深ネギである。今日でも地域ブランドとして評価されているが、ネギの輸入増加を背景に、需要の周年化や出荷形態に適合した新たな地域特産品種の育成が求められていた。そこで、県内篤農家による自家選抜系統に着目し、これをさらに改良し、「湘南」の改良選抜系統を育成した。

[成果の内容・特徴]

1. 育成経過

平成3年より厚木市山際の野路稔氏が「湘南」より選抜育成し、平成12年採種に採種した系統「NS01」について特性検定を実施し、葉折れが少ない、葉鞘部の伸長が良いなど優良な特性を確認した。しかし、分げつについては「湘南」と同程度以上に認められ、剥きネギの出荷形態では問題点もあった。そこで、野路氏が平成13年に採種した系統「NS11」より、収穫時に分げつの認められない個体を集団選抜し、「KNS21」を育成した。

2. 品種特性

- (1) 「KNS21」は農林水産省が定めた「ネギ品種特性分類調査基準」によって評価すると、草姿は立性から半開、葉数は中から多、葉身長は中、葉身の太さは中から太、葉色は緑、葉鞘部の長さは中から長、葉鞘部の太さは細から中、葉鞘外観の色は白であった。
- (2) 「KNS21」は「湘南」と比較して、葉折れが少なく、耐寒性があり、葉鞘部の伸びが早い。また、「湘南」と同様に葉鞘部が軟らかく、食感が良い。分げつの程度は「湘南」と同等からやや少なく、秋冬どり作型の株間3cmの栽植密度では、剥きネギ調製によるいわゆる「抱きネギ」の発生も少なく、実用性が確認された(表1, 2, 図1)。
- (3) 「KNS21」の抽だいは3月中旬まきで2月下旬頃であった(表3)。

[成果の活用面・留意点]

1. 種苗登録申請を行う。
2. 適応作型は2, 3月まき11~2月どりである。

[具体的データ]

表1 形態的特性 (平成15年度)

品種 系統	調査日	土ねぎ ¹⁾							剥きねぎ ¹⁾				
		株数	収量	葉数	草丈	葉鞘長	葉鞘太	収穫株率 ²⁾	重量	葉鞘太	葉鞘長	軟白長	分けつ率 ³⁾
		/m	t /10a	枚	cm	cm	mm	%	g	mm	cm	cm	%
KNS21	12/25	32	5.7	3.9	106	35	17	99	85	15	39	33	9
	2/17	33	6.3	3.0	94	45	20	97	114	17	46	39	11
NS11	12/25	37	5.4	4.5	103	39	17	111	78	13	42	35	26
	2/17	35	6.5	3.4	96	45	20	104	105	17	46	39	26
湘南	12/25	36	5.0	3.7	105	39	18	107	76	14	41	35	11
	2/17	35	5.0	2.1	85	42	20	107	98	17	42	37	7
石倉	12/25	33	5.1	3.8	105	32	19	98	105	16	39	30	2
	2/17	32	5.0	2.3	80	41	22	97	114	19	41	34	5

株間3cmで栽培。

株数(および剥きねぎ本数)、土ねぎ収量は1m×3反復の平均値、他は1mより3分の1をランダム抽出×3反復の平均値

¹⁾ 土ねぎは根、枯れ葉を除き、剥きねぎは葉3枚を残して剥皮し、全長5.7cmに切断して調製、²⁾ 収穫株率% = (土ねぎ株数 / 定植本数) × 100、³⁾ 分けつ率% = (剥きねぎ本数 - 土ねぎ本数) / 土ねぎ本数



NS11



KNS21

図1 草姿 (H16年2月17日撮影)

表2 葉折れ状況 (H13年10月調査)

品種・系統	葉折れ%
NS01	26
湘南	41

100株程度×3反復の全展開葉を調査

表3 抽台状況 (H16年3月23日調査)

品種・系統	抽だい率%
KNS21	19.6
NS11	22.2
湘南	4.5
石倉	42.3

22~35株×3反復の平均値

[資料名]平成13~15年度試験研究成績書(野菜)

[研究課題名]根深ネギ「湘南」改良系統の特性評価

[研究期間]平成13~16年度

[研究者担当名]河田隆弘